



2022年3月期 第3四半期決算短信〔日本基準〕(連結)

2022年2月9日

上場会社名 凸版印刷株式会社 上場取引所 東
 コード番号 7911 URL <https://www.toppan.co.jp/>
 代表者 (役職名) 代表取締役社長 (氏名) 磨 秀晴
 問合せ先責任者 (役職名) 取締役常務執行役員財務本部長 (氏名) 黒部 隆 (TEL) 03-3835-5665
 四半期報告書提出予定日 2022年2月10日 配当支払開始予定日 —
 四半期決算補足説明資料作成の有無 : 有
 四半期決算説明会開催の有無 : 有 (証券アナリスト・機関投資家向け)

(百万円未満切捨て)

1. 2022年3月期第3四半期の連結業績(2021年4月1日~2021年12月31日)

(1) 連結経営成績(累計)

(%表示は、対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		親会社株主に帰属する四半期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
2022年3月期第3四半期	1,109,119	4.9	44,409	36.6	47,707	55.4	106,449	32.2
2021年3月期第3四半期	1,057,748	△1.8	32,506	9.3	30,692	2.1	80,548	△0.2

(注) 包括利益 2022年3月期第3四半期 108,125百万円(△1.7%) 2021年3月期第3四半期 110,004百万円(62.4%)

	1株当たり 四半期純利益		潜在株式調整後 1株当たり 四半期純利益	
	円	銭	円	銭
2022年3月期第3四半期	314	98	—	—
2021年3月期第3四半期	232	68	—	—

(2) 連結財政状態

	総資産		純資産		自己資本比率	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%
2022年3月期第3四半期	2,339,850	59.8	1,472,400	59.8	—	—
2021年3月期	2,363,503	56.0	1,453,164	56.0	—	—

(参考) 自己資本 2022年3月期第3四半期 1,399,368百万円 2021年3月期 1,323,721百万円

2. 配当の状況

	年間配当金					
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計	
	円	銭	円	銭	円	銭
2021年3月期	—	20.00	—	20.00	40.00	—
2022年3月期	—	20.00	—	—	—	—
2022年3月期(予想)	—	—	—	20.00	40.00	—

(注) 直近に公表されている配当予想からの修正の有無 : 無

3. 2022年3月期の連結業績予想(2021年4月1日~2022年3月31日)

(%表示は、対前期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		親会社株主に帰属する当期純利益		1株当たり 当期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円	銭
通期	1,500,000	2.3	60,000	2.1	59,000	1.6	115,000	40.2	342	87

(注) 直近に公表されている業績予想からの修正の有無 : 有

※「1株当たり当期純利益」の算定上の基礎となる期中平均株式数については、2021年12月31日現在の発行済株式数(自己株式数を除く)を使用しております。

※ 注記事項

- (1) 当四半期連結累計期間における重要な子会社の異動(連結範囲の変更を伴う特定子会社の異動) : 無
- (2) 四半期連結財務諸表の作成に特有の会計処理の適用 : 無
- (3) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示
- ① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更 : 有
 - ② ①以外の会計方針の変更 : 無
 - ③ 会計上の見積りの変更 : 無
 - ④ 修正再表示 : 無

(4) 発行済株式数(普通株式)

① 期末発行済株式数(自己株式を含む)	2022年3月期3Q	349,706,240株	2021年3月期	349,706,240株
② 期末自己株式数	2022年3月期3Q	14,305,199株	2021年3月期	7,671,677株
③ 期中平均株式数(四半期累計)	2022年3月期3Q	337,954,790株	2021年3月期3Q	346,180,151株

※ 四半期決算短信は公認会計士又は監査法人の四半期レビューの対象外です

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、本資料発表日現在において想定できる経済情勢、市場動向などを前提として作成したものであり、今後の様々な要因により、予想と異なる結果となる可能性があります。

○添付資料の目次

1. 当四半期決算に関する定性的情報	2
(1) 経営成績に関する説明	2
(2) 財政状態に関する説明	4
(3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明	4
2. 四半期連結財務諸表及び主な注記	5
(1) 四半期連結貸借対照表	5
(2) 四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書	7
四半期連結損益計算書	7
四半期連結包括利益計算書	9
(3) 四半期連結財務諸表に関する注記事項	10
(継続企業の前提に関する注記)	10
(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)	10
(会計方針の変更)	11
(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)	13
(セグメント情報等)	13
(企業結合等関係)	15
(収益認識関係)	17
(重要な後発事象)	17

1. 当四半期決算に関する定性的情報

(1) 経営成績に関する説明

当第3四半期連結累計期間(2021年4月1日から2021年12月31日まで)におけるわが国経済は、新型コロナウイルスによる厳しい状況において、各種政策の効果や海外経済の改善もあり景気が持ち直していくことが期待されるものの、変異株をはじめとした感染症の動向や金融資本市場の変動の影響など、先行き不透明な状況が続いており、引き続き注視する必要があります。

当社グループを取り巻く環境におきましては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による個人消費や企業活動の停滞、情報媒体のデジタルシフトによるペーパーメディアの需要減少など、既存の印刷事業においては厳しい経営環境が続きました。一方、生活様式の変化に伴うデジタル需要の増加や地球環境に対する意識の高まりなど、新たな需要が見込まれています。また、SDGsの達成に向け、企業の積極的な取り組みが期待されています。

このような環境のなかで当社グループは、収益力の向上を目指す「事業ポートフォリオの変革」、新たな成長を創出する「経営基盤の強化」、持続的な価値向上を支える「ESGへの取り組み深化」の3つを重要な経営課題と位置付け、事業の拡大を図ってまいります。また、「Digital & Sustainable Transformation」を掲げ、特に全社をあげて取り組むDXのコンセプトを「Erhoeht-X(エルヘートクロス)」とし、社会や企業のデジタル変革を支援してまいります。SDGsへの貢献に向けては、特に注力すべき分野を特定した「TOPPAN Business Action for SDGs」に基づき活動しております。また、安定した財務基盤を確保しながら新たな収益モデルを早期確立すべく、新規事業においては積極的に経営資源を投入していくとともに、既存事業においてはさらなる技術開発強化やコスト削減など、競争優位性の確立を推進してまいります。

以上の結果、当第3四半期連結累計期間の売上高は前年同四半期連結累計期間に比べ4.9%増の1兆1,091億円となりました。また、営業利益は36.6%増の444億円となり、経常利益は55.4%増の477億円となりました。親会社株主に帰属する四半期純利益は32.2%増の1,064億円となりました。

なお、「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等の適用により、従来の方法に比べて、売上高は84億円減少し、営業利益、経常利益はそれぞれ2億円増加しております。

当第3四半期連結累計期間におけるセグメント別の状況は以下のとおりです。

《情報コミュニケーション事業分野》

セキュア関連では、ICカード製造が減少し、前年を下回りました。海外では、企業における顧客接点構築とサプライチェーン管理を可能にするID認証サービスを欧州や中国の市場に展開するとともに、アフリカを中心とした新興国地域に顧客基盤をもつシステムインテグレーターのFace Technologies社を買収するなど、海外セキュア事業の拡大に取り組みました。また、EC需要増などで拡大する物流業界のDX需要を取り込むため、デジタル技術の活用により物流効率化を推進する株式会社アイオイ・システムを買収しました。

ビジネスフォーム関連では、ビジネスフォームは、ワクチン接種関連帳票の取り込みや運輸ラベルの増加があったものの、金融機関を中心とした非対面手続きの促進による窓口帳票の減少などにより、わずかに減収となりました。データ・プリント・サービスは、ワクチン接種関連通知物の取り込みや、金融機関、通信販売を中心としたダイレクトメール(DM)需要の回復がありましたが、経済対策関連の縮小などにより、わずかに減収となりました。

コンテンツ・マーケティング関連では、チラシをはじめとした商業印刷の減少があったものの、ゲームカードなどの出版印刷、電子化の需要を取り込んだデジタルコンテンツ、デジタルマーケティングの増加や、昨年度に新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け急減したSP関連ツールの反動により、前年を上回りました。また、メタバース市場の拡大を見据え、仮想空間上にショッピングモールのように構築されたバーチャル店舗を周遊できるアプリを開発するなど、DXの取り組みを推進しました。電子書籍関連では、海外企業の参入が本格化し競争が激しさを増すなか、株式会社BookLiveは、データ分析に基づき制作した自社オリジナルコミックがヒットし、新規顧客の増加と売上増に寄与しました。

BPO関連では、企業や政府・地方自治体等のアウトソーシング需要を取り込み、好調に推移しました。

以上の結果、情報コミュニケーション事業分野の売上高は前年同四半期連結累計期間に比べ2.8%増の6,412億円、営業利益は5.2%増の295億円となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用により、売上高は14億円増加し、営業利益は3億円増加しております。

《生活・産業事業分野》

パッケージ関連では、軟包材は、国内ではトイレタリーや外食向けの需要が回復傾向にあるほか、海外ではインドネシアを中心に販売が拡大し、増収、紙器は、前年並みとなりました。環境配慮の機運が高まるなか、サステナブル包材の拡販に注力しており、世界最高水準のバリア性能を持つ透明バリアフィルム「GL BARRIER」を使用した紙素材のチャック付きスタンディングパウチなど、高いバリア性と環境適性を両立したバリアパッケージの開発に取り組みました。なお、「GL BARRIER」はその高い環境適性の訴求により販売が拡大しており、昨年度はアルミ箔を用いたパッケージに比べ、CO₂排出量を約63,000トン削減しました。また、米国包装材メーカーのInterFlex社を買収し、バリアフィルムを用いたサステナブル包材の欧米における現地供給体制を強化しました。

建装材関連は、国内では、コマース市場はコロナ前の水準には届かないものの、住宅市場の緩やかな回復や、高意匠・高機能化粧シートの販売拡大により、増収となりました。海外では、巣ごもり需要の拡大が落ち着きつつあるものの、家具等インテリア向け化粧シートの販売が好調に推移し、増収となりました。また、増加する環境衛生ニーズに対応すべく、既存のテーブルやタッチパネルなどに貼付可能な「トッパン抗ウイルス・抗菌クリアシート」を開発し、第三者機関であるSIAA（抗菌製品技術協議会）の認証を取得しました。

以上の結果、生活・産業事業分野の売上高は前年同四半期連結累計期間に比べ2.6%増の3,236億円、営業利益は10.9%増の222億円となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用により、売上高は80億円減少し、営業利益は0億円減少しております。

《エレクトロニクス事業分野》

半導体関連では、フォトマスクは、5G・AIなどを背景とした需要拡大に加え、車載向けをはじめとした幅広い用途で半導体需要が拡大し、好調に推移しました。高密度半導体パッケージ基板のFC-BGA基板は、通信データ量の増大に伴い需要が高まるなか、業界最高水準の品質と技術を武器に大型・高多層の高付加価値品を取り込み、増収となりました。また、次世代LPWA（低消費電力広域ネットワーク）通信規格「ZETA」を用いた、固有ID情報を持つ長距離通信が可能なタグ「ZETag®（ゼタグ）」と、その位置情報を管理するクラウド型システムプラットフォーム「ZETagDRIVE™（ゼタグ・ドライブ）」を開発するなど、IoTの本格普及に向けた取り組みを強化しました。

ディスプレイ関連では、カラーフィルタは、車載向けを中心に需要が回復基調にあるものの、事業譲渡の影響により前年を下回りました。反射防止フィルムは、テレワークや巣ごもり需要によりテレビ、ノートPC、モニター向け需要が拡大し、好調に推移しました。TFT液晶パネルは、マレーシアにおけるロックダウンの影響を受けたものの、車載や産業機器向けなどの需要回復により、前年を上回りました。また、衛生配慮による非接触ニーズが高まるなか、パネルと並行に空中に映像を出現させる新方式の空中タッチディスプレイをオフィスビル向けに提供するなど、新たな事業の拡大に取り組みました。

以上の結果、エレクトロニクス事業分野の売上高は前年同四半期連結累計期間に比べ20.5%増の1,593億円、営業利益は148.2%増の197億円となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用により、売上高は18億円減少し、営業利益は0億円減少しております。

(2) 財政状態に関する説明

当第3四半期連結会計期間末における総資産は、前連結会計年度末に比べ236億円減少し、2兆3,398億円となりました。これはのれんが217億円増加したものの、現金及び預金が483億円減少したことなどによるものです。

負債は、前連結会計年度末に比べ428億円減少し、8,674億円となりました。これは長期借入金（1年内返済予定を含む）が162億円、賞与引当金が112億円、短期借入金が107億円、それぞれ減少したことなどによるものです。

純資産は、前連結会計年度末に比べ192億円増加し、1兆4,724億円となりました。これは非支配株主持分が564億円、その他有価証券評価差額金が143億円、それぞれ減少し、自己株式が125億円増加したものの、利益剰余金が922億円、為替換算調整勘定が105億円、それぞれ増加したことなどによるものです。

(3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明

最近の業績動向等を踏まえ、2021年12月10日に公表しました業績予想を修正いたします。詳細については、本日別途公表しております「2022年3月期 通期連結業績予想の修正に関するお知らせ」をご参照ください。

2. 四半期連結財務諸表及び主な注記

(1) 四半期連結貸借対照表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (2021年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	513,972	465,656
受取手形及び売掛金	394,071	—
受取手形、売掛金及び契約資産	—	397,766
有価証券	29,418	27,025
商品及び製品	46,794	53,367
仕掛品	28,451	31,908
原材料及び貯蔵品	28,325	38,620
その他	29,700	39,124
貸倒引当金	△3,739	△3,705
流動資産合計	1,066,994	1,049,763
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	219,779	214,843
機械装置及び運搬具（純額）	155,730	156,138
土地	150,863	151,924
建設仮勘定	21,526	17,029
その他（純額）	23,878	24,486
有形固定資産合計	571,778	564,421
無形固定資産		
のれん	11,373	33,075
その他	36,808	37,401
無形固定資産合計	48,181	70,477
投資その他の資産		
投資有価証券	631,766	610,085
その他	45,105	45,403
貸倒引当金	△324	△301
投資その他の資産合計	676,548	655,187
固定資産合計	1,296,508	1,290,087
資産合計	2,363,503	2,339,850

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (2021年12月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	235,538	239,427
短期借入金	30,588	19,860
1年内返済予定の長期借入金	10,074	39,530
未払法人税等	26,487	19,768
賞与引当金	24,176	12,961
その他の引当金	2,348	984
その他	107,277	108,499
流動負債合計	436,492	441,032
固定負債		
社債	90,000	90,000
長期借入金	193,581	147,869
退職給付に係る負債	48,697	50,704
その他の引当金	6,142	4,862
その他	135,425	132,981
固定負債合計	473,847	426,418
負債合計	910,339	867,450
純資産の部		
株主資本		
資本金	104,986	104,986
資本剰余金	126,793	126,334
利益剰余金	832,978	925,233
自己株式	△10,886	△23,418
株主資本合計	1,053,871	1,133,136
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	273,431	259,108
繰延ヘッジ損益	△176	△139
為替換算調整勘定	△5,744	4,774
退職給付に係る調整累計額	2,340	2,488
その他の包括利益累計額合計	269,850	266,232
非支配株主持分	129,442	73,032
純資産合計	1,453,164	1,472,400
負債純資産合計	2,363,503	2,339,850

(2) 四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書

四半期連結損益計算書

第3四半期連結累計期間

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自2020年4月1日 至2020年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自2021年4月1日 至2021年12月31日)
売上高	1,057,748	1,109,119
売上原価	847,795	873,434
売上総利益	209,952	235,685
販売費及び一般管理費		
運賃	20,490	21,048
貸倒引当金繰入額	269	△120
役員報酬及び給料手当	66,824	72,148
賞与引当金繰入額	4,655	5,715
役員賞与引当金繰入額	344	269
退職給付費用	3,550	3,389
役員退職慰労引当金繰入額	208	260
旅費	2,238	2,561
研究開発費	11,283	13,498
その他	67,579	72,505
販売費及び一般管理費合計	177,446	191,275
営業利益	32,506	44,409
営業外収益		
受取利息	306	315
受取配当金	6,149	5,435
持分法による投資利益	448	1,546
その他	2,257	4,525
営業外収益合計	9,162	11,823
営業外費用		
支払利息	3,124	2,782
為替差損	2,799	—
その他	5,052	5,743
営業外費用合計	10,976	8,526
経常利益	30,692	47,707

(単位:百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自2020年4月1日 至2020年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自2021年4月1日 至2021年12月31日)
特別利益		
固定資産売却益	571	1,476
投資有価証券売却益	103,263	107,051
関係会社株式売却益	—	848
段階取得に係る差益	—	500
特別退職金戻入額	—	196
負ののれん発生益	—	31
退職給付信託返還益	2,800	—
関係会社清算益	3	—
特別利益合計	106,638	110,105
特別損失		
固定資産除売却損	2,582	1,006
投資有価証券売却損	735	371
投資有価証券評価損	9,424	728
減損損失	3,265	621
特別退職金	64	390
関係会社清算損	—	347
独占禁止法関連損失引当金繰入額	—	196
災害による損失	—	81
特別損失合計	16,071	3,745
税金等調整前四半期純利益	121,259	154,067
法人税、住民税及び事業税	41,528	39,663
法人税等調整額	△776	4,739
法人税等合計	40,752	44,403
四半期純利益	80,507	109,664
非支配株主に帰属する四半期純利益 又は非支配株主に帰属する四半期純損失(△)	△41	3,215
親会社株主に帰属する四半期純利益	80,548	106,449

四半期連結包括利益計算書
第3四半期連結累計期間

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自 2020年4月1日 至 2020年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)
四半期純利益	80,507	109,664
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	35,187	△13,795
繰延ヘッジ損益	30	36
為替換算調整勘定	△5,006	12,272
退職給付に係る調整額	△2,031	55
持分法適用会社に対する持分相当額	1,318	△108
その他の包括利益合計	29,497	△1,538
四半期包括利益	110,004	108,125
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	109,228	102,830
非支配株主に係る四半期包括利益	775	5,294

(3) 四半期連結財務諸表に関する注記事項

(継続企業的前提に関する注記)

該当事項はありません。

(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)

当社は、2020年12月4日開催の取締役会決議に基づき、当第3四半期連結累計期間において6,681,200株、12,617百万円の自己株式の取得を行っております。この取得等により、自己株式が12,531百万円増加し、当第3四半期連結会計期間末において自己株式が23,418百万円となっております。また、2021年11月10日開催の取締役会決議に基づき、当第3四半期連結累計期間において、当社の連結子会社であるトッパン・フォームズ株式会社の普通株式に対する公開買付けを実施し、同社の普通株式39,563,682株を取得したことなどにより、資本剰余金が458百万円減少し、当第3四半期連結会計期間末において資本剰余金が126,334百万円となっております。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を第1四半期連結会計期間の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することとしております。これによる従来の収益認識方法からの主な変更点は以下のとおりです。

(1) 製品及び商品の販売に係る収益認識

従来は、主に出荷時に収益を認識しておりましたが、国内販売においては主に顧客に製品又は商品が到着した時に、輸出販売においては主にインコタームズ等で定められた貿易条件に基づき支配が顧客に移転した時に収益を認識する方法に変更しております。

(2) 一定期間にわたって支配が移転する取引に係る収益認識

BPOサービスや、ソフトウェア・コンテンツの受注制作業務等について、従来は、主に財・サービスの提供終了時に収益を認識しておりましたが、財又はサービスに対する支配が顧客に一定の期間にわたり移転する場合には、財又はサービスを顧客に移転する履行義務を充足するにつれて、一定の期間にわたり収益を認識する方法に変更しております。また、スペースデザイン・施工業務等の工事契約に関して、従来は、工事の進捗部分について成果の確実性が認められる場合には工事進行基準を、その他の工事については工事完成基準を適用しておりましたが、財又はサービスに対する支配が顧客に一定の期間にわたり移転する場合には、財又はサービスを顧客に移転する履行義務を充足するにつれて、一定の期間にわたり収益を認識する方法に変更しております。履行義務の充足に係る進捗度の測定は、主に各報告期間の期末日までに発生した実際原価が、予想される総原価の合計に占める割合に基づいて行っております。また、契約の初期段階等、履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積もることができないが、発生する費用を回収することが見込まれる場合は、原価回収基準にて収益を認識しております。

(3) 代理人取引に係る収益認識

一部の取引について、従来は、顧客から受け取る対価の総額を収益として認識しておりましたが、顧客への財又はサービスの提供における当社グループの役割が代理人に該当する取引(顧客に移転する財又はサービスの支配を獲得せず、これらの財又はサービスを手配するサービスのみを提供している取引)については、顧客から受け取る額から仕入先に支払う額を控除した純額で収益を認識する方法に変更しております。

(4) 有償支給取引に係る収益認識

従来は、有償支給した支給品の消滅を認識しておりましたが、支給品を買い戻す義務を負っている場合、有償支給先に残存する支給品について棚卸資産を引き続き認識するとともに、当該支給品の期末棚卸高相当額について有償支給に係る負債を認識する方法に変更しており、有償支給に係る負債を流動負債のその他に含めて表示しております。なお、当該取引において支給品の譲渡に係る収益は認識しておりません。

(5) 有償受給取引に係る収益認識

従来は、原材料等の仕入価格を含めた対価の総額で収益を認識しておりましたが、原材料等の仕入価格を控除した純額で収益を認識するとともに、当社グループに残存する当該支給品の期末棚卸高相当額について有償支給に係る資産を認識する方法に変更しており、有償支給に係る資産を流動資産のその他に含めて表示しております。

(6) 返品権付きの販売に係る収益認識

従来は、売上総利益相当額等に基づき返品調整引当金を計上しておりましたが、返品されると見込まれる製品又は商品については、変動対価に関する定めに従って、販売時に収益及び売上原価相当額を認識せず、当該製品又は商品について受け取った又は受け取る対価の額で返金負債を認識し、返金負債の決済時に顧客から当該製品又は商品を回収する権利を返品資産として認識する方法に変更しており、返金負債を流動負債のその他に、返品資産を流動資産のその他に含めて表示しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、第1四半期連結会計期間の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、第1四半期連結会計期間の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。ただし、収益認識会計基準第86項に定める方法を適用し、第1四半期連結会計期間の期首より前までに従前の取扱いに従ってほとんど全ての収益の額を認識した契約に、新たな会計方針を遡及適用しておりません。また、収益認識会計基準第86項また書き(1)に定める方法を適用し、第1四半期連結会計期間の期首より前までに行われた契約変更について、全ての契約変更を反映した後の契約条件に基づき、会計処理を行い、その累積的影響額を第1四半期連結会計期間の期首の利益剰余金に加減しております。

この結果、当第3四半期連結累計期間の売上高は8,480百万円、売上原価は8,753百万円、販売費及び一般管理費は22百万円、それぞれ減少し、営業利益、経常利益及び税金等調整前四半期純利益は294百万円、それぞれ増加しております。また、利益剰余金の当期首残高は30百万円増加しております。

収益認識会計基準等を適用したため、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」に表示していた「受取手形及び売掛金」は、第1四半期連結会計期間より「受取手形、売掛金及び契約資産」に含めて表示することとしました。なお、収益認識会計基準第89-2項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度について新たな表示方法により組替えを行っておりません。さらに、「四半期財務諸表に関する会計基準」（企業会計基準第12号 2020年3月31日）第28-15項に定める経過的な取扱いに従って、前第3四半期連結累計期間に係る顧客との契約から生じる収益を分解した情報を記載しておりません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」（企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。）等を第1四半期連結会計期間の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第10号 2019年7月4日）第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、四半期連結財務諸表に与える影響はありません。

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

当第3四半期連結累計期間に係る四半期連結キャッシュ・フロー計算書は作成しておりません。
 なお、第3四半期連結累計期間に係る減価償却費（のれんを除く無形固定資産に係る償却費を含む。）は、次のとおりであります。

	前第3四半期連結累計期間 (自 2020年4月1日 至 2020年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)
減価償却費	46,626百万円	46,675百万円

(セグメント情報等)

I 前第3四半期連結累計期間(自 2020年4月1日 至 2020年12月31日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位：百万円)

	報告セグメント				調整額 (注)	四半期連結 損益計算書 計上額
	情報コミュニ ケーション 事業分野	生活・産業 事業分野	エレクトロ ニクス 事業分野	計		
売上高						
外部顧客への売上高	616,210	309,763	131,773	1,057,748	—	1,057,748
セグメント間の 内部売上高又は振替高	7,745	5,689	438	13,873	△13,873	—
計	623,956	315,453	132,212	1,071,622	△13,873	1,057,748
セグメント利益 (営業利益)	28,097	20,035	7,960	56,093	△23,587	32,506

(注)セグメント利益の調整額には、各報告セグメントに配分していない全社費用△23,645百万円等が含まれております。全社費用は、主に当社の本社部門及び基礎研究部門等に係る費用であります。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

(固定資産に係る重要な減損損失)

重要性が乏しいため記載を省略しております。

(のれんの金額の重要な変動)

重要性が乏しいため記載を省略しております。

II 当第3四半期連結累計期間(自 2021年4月1日 至 2021年12月31日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位: 百万円)

	報告セグメント				調整額 (注)	四半期連結 損益計算書 計上額
	情報コミュニ ケーション 事業分野	生活・産業 事業分野	エレクトロ ニクス 事業分野	計		
売上高						
外部顧客への売上高	632,931	317,551	158,636	1,109,119	—	1,109,119
セグメント間の 内部売上高又は振替高	8,355	6,115	695	15,167	△15,167	—
計	641,287	323,666	159,332	1,124,286	△15,167	1,109,119
セグメント利益 (営業利益)	29,546	22,216	19,755	71,518	△27,108	44,409

(注)セグメント利益の調整額には、各報告セグメントに配分していない全社費用△27,246百万円等が含まれております。全社費用は、主に当社の本社部門及び基礎研究部門等に係る費用であります。

2. 報告セグメントの変更等に関する事項

会計方針の変更に記載のとおり、第1四半期連結会計期間の期首から収益認識会計基準等を適用し、収益認識に関する会計処理方法を変更したため、事業セグメントの利益又は損失の算定方法を同様に變更しております。

当該変更により、従来の方法に比べて、当第3四半期連結累計期間の「情報コミュニケーション事業分野」の売上高は1,416百万円増加、セグメント利益は354百万円増加し、「生活・産業事業分野」の売上高は8,039百万円減少、セグメント利益は36百万円減少し、「エレクトロニクス事業分野」の売上高は1,857百万円減少、セグメント利益は22百万円減少しております。

3. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

(固定資産に係る重要な減損損失)

重要性が乏しいため記載を省略しております。

(のれんの金額の重要な変動)

「生活・産業事業分野」において、InterFlex Investment Holdings, Inc. の株式を取得したことに伴い、第2四半期連結会計期間より、同社及びその子会社4社を連結の範囲に含めております。

当該事象によるのれんの増加額は、当第3四半期連結累計期間において18,996百万円であります。

なお、のれんの増加額は、当第3四半期連結会計期間末において取得原価の配分が完了していないため、暫定的に算定された金額であります。

(企業結合等関係)

(株式取得による企業結合)

当社は、2021年7月16日にInterFlex Investment Holdings, Inc. (以下「InterFlex Group」という。)の株式譲渡契約を締結し、2021年7月23日付で当該株式を取得し、子会社化いたしました。

1. 企業結合の概要

①被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 InterFlex Investment Holdings, Inc. (他4社)

事業の内容 食品用包装を中心とする軟包材コンバーター

②企業結合を行った主な理由

当社はこれまで、欧米における透明蒸着バリアフィルム「GL BARRIER」の製造販売拠点として「TOPPAN USA ジョージア工場」を2016年4月に竣工し、日本国内だけでなく、北米や欧州、中南米エリアへの販売を強化してまいりました。

さらに、2021年度を初年度とする中期経営計画(2021年4月～2023年3月)を2021年5月に発表し、基本方針として「Digital & Sustainable Transformation」を掲げております。なかでも重点施策の1つとして、パッケージ事業においては、サステナブル需要の獲得と地産地消体制の構築によるグローバル展開の加速を計画しております。

一方、InterFlex Groupは、1975年に創業し米国ノースカロライナ州にグループ本社を置き、各種食品向けの軟包材を製造・販売しており、北米に3か所、英国に2か所の製造拠点を保有し、約430名の従業員が在籍するグローバル企業グループです。

当社は既にコンバーティング事業を展開しているアジア(インドネシア・上海・タイ)に続き、InterFlex Groupの持つ欧米のコンバーティング拠点を加える事で、グローバルに当社の包材を供給できる体制を整えます。これにより、モノマテリアル材料を含めた包装材料から最終製品までをワンストップで提供することのできる、グローバルパッケージメーカーとなることを目指してまいります。

③企業結合日

2021年7月23日

④企業結合の法的形式

株式取得

⑤結合後企業の名称

変更はありません。

⑥取得した議決権比率

100%

⑦取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が現金を対価として株式を取得したためであります。

2. 四半期連結累計期間に係る四半期連結損益計算書に含まれる被取得企業の業績の期間

被取得企業の会計期間末日(みなし取得日)である2021年9月30日と当第3四半期連結会計期間との差異が3ヶ月を超えないため、当第3四半期累計期間においては貸借対照表のみを連結しており、四半期連結損益計算書に被取得企業の業績は含まれておりません。

3. 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	142百万USドル
取得原価		142百万USドル

4. 主要な取得関連費用の内容及び金額

アドバイザリー費用等 627百万円

5. 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

①発生したのれん

18,996百万円

のれんは、当第3四半期連結会計期間末において取得原価の配分が完了していないため、暫定的に算定された金額であります。

②発生原因

今後の事業展開によって期待される将来の超過収益力から発生したものであります。

③償却方法及び償却期間

投資効果の発現する期間にわたって均等償却する予定であります。

(共通支配下の取引等)

(公開買付けによる子会社株式の取得)

当社は、2021年11月10日開催の取締役会において、当社の連結子会社であるトッパン・フォームズ株式会社を当社の完全子会社とすることを目的として、同社の普通株式を金融商品取引法による公開買付けにより取得することを決議し、当該公開買付けは2021年12月23日をもって終了しております。

1. 取引の概要

①結合当事企業の名称及びその事業の内容

結合当事企業の名称 トッパン・フォームズ株式会社

事業の内容 デジタルビジネス事業分野、インフォメーション・プロセス事業分野、プロダクトソリューション事業分野、グローバル事業分野

②企業結合日

株式公開買付けによる取得 2021年12月30日 (みなし取得日 2021年12月31日)

③企業結合の法的形式

現金を対価とした株式取得

④結合後企業の名称

変更はありません。

⑤追加取得後の子会社株式の株券等所有割合

企業結合前の株券等所有割合 60.74%

株式公開買付け後の株券等所有割合 96.38%

⑥取引の目的を含む取引の概要

当社グループの経営戦略における意思決定を柔軟化・迅速化させ、当社グループ全体での持続的な企業価値の向上を図るため、非支配株主が保有する株式を取得したものであります。

2. 実施した会計処理の概要

「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号 2019年1月16日)及び「企業結合会計基準及び事業分離等会計基準に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第10号 2019年1月16日)に基づき、共通支配下の取引等のうち、非支配株主との取引として処理しております。

3. 追加取得した子会社株式の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	61,323百万円
取得原価		61,323百万円

4. 非支配株主との取引に係る持分の変動に関する事項

①資本剰余金の主な変動要因

子会社株式の追加取得

②非支配株主との取引によって減少した資本剰余金の金額

383百万円

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を分解した情報

当第3四半期連結累計期間(自2021年4月1日至2021年12月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			合計
	情報コミュニケーション 事業分野	生活・産業 事業分野	エレクトロ ニクス 事業分野	
日本	551,674	207,500	44,776	803,951
アジア	29,947	53,617	91,911	175,476
その他	51,109	56,424	21,948	129,482
顧客との契約から生じる収益	632,731	317,542	158,636	1,108,910
その他の収益	200	8	—	209
外部顧客への売上高	632,931	317,551	158,636	1,109,119

(重要な後発事象)

(自己株式の取得)

当社は、2022年2月9日開催の取締役会において、会社法第459条第1項の規定による定款の定めに基づき、自己株式を取得することを決議いたしました。

1. 自己株式の取得を行う理由

株主還元の強化と資本効率の向上を図るとともに、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策を可能とするためであります。

2. 取得に係る事項の内容

- ①取得する株式の種類 当社普通株式
- ②取得する株式の総数 1,300万株(上限)
(発行済株式総数(自己株式を除く)に対する割合 3.88%)
- ③株式の取得価額の総額 200億円(上限)
- ④取得期間 2022年2月10日から2022年11月30日まで
- ⑤取得方法 東京証券取引所における市場買付